

平成 19 年

# 国家の風景

## 埴輪の描く古代

7月24日（火）から

9月21日（金）まで

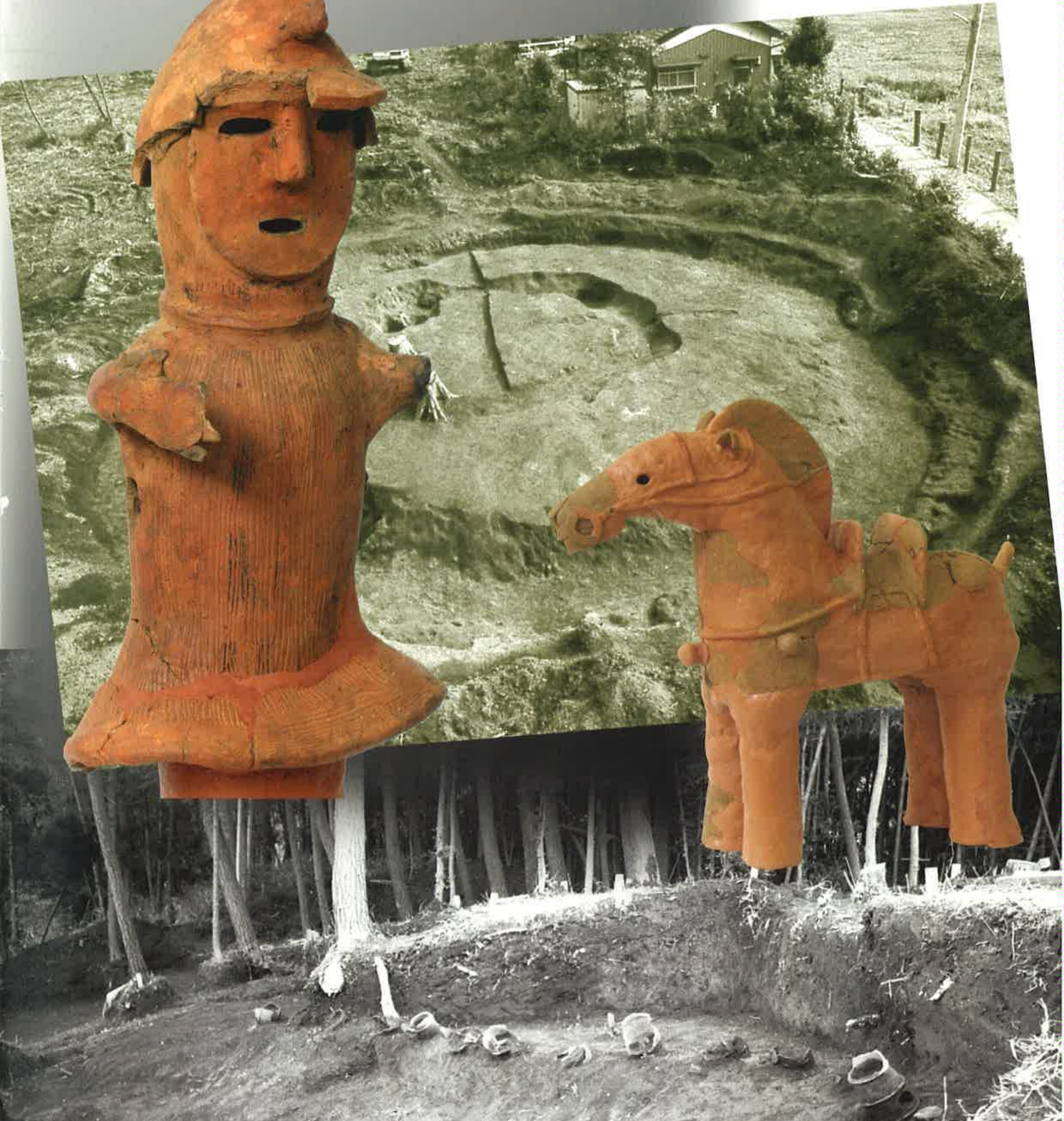
午前10時から午後4時30分

入館無料／休館日 月曜日

\*9月17日（月）の祝日は開館

して翌日18日（火）臨時休館

します



## 「 国家の風景 ―埴輪の描く古代― 」

日本列島に住んだ人々の歴史のおおきな転換期のひとつが統一古代国家の成立時期である古墳時代でした。

古墳（こふん）とは大きな土盛りで塚を築き古代権力者の墓としたものです。統一古代国家ができつつあった4世紀から律令国家に移行する7世紀まで、このような古墳が本州以南から九州にかけて盛んに築かれました。この期間を「古墳時代」といいます。西日本の大和地域が統一国家の中心でしたが、古墳の広がりとともに全国の各地域で人々は政治的な、軍事的な動きのなかに組み込まれてゆきます。

「埴輪（はにわ）」は古墳のまわりにたてられた焼き物で、はじめは壺や置き台の模型でしたが、のちに刀や武器、鹿や馬、水鳥など種類が増え、家や兵士、巫女や農夫など当時の情景を表現するものが作られました。

取手市内にも古墳や古墳時代の集落遺跡があり、地方集落の生活の様子を知ることができます。市内では発掘された古墳から多く埴輪が出土しており、それらに表現された姿から、当時の支配者層である兵士や庶民の生活を知ることができます。今回の展示は市内の古墳から出土した形象埴輪を中心に国家が成立する時代の様子をご紹介します。

### 特別展示【史記の時代 ―壮大な中国建国の記憶―】

日本の国の成り立ちは、東アジア各国から影響を強く受けました。古代中国では青銅器文明が発達して武器や貨幣など国家の基礎となる製品がつくられました。その実物を見るため、今回は個人コレクションの一部を参考展示します。

### 講演会 平成19年9月8日（土）午後1時30分から

「東国の埴輪」 講師 諸星政得氏（茨城キリスト教大学講師、取手市文化財保護審議会会長）  
会場 埋蔵文化財センター2階 講座室／予約不要 先着40名 無料

### 展示解説 平成19年8月11日（土）および25日（土） 午後1時30分から

（2日間とも内容は同じものです。） 案内人 埋蔵文化財センター職員  
会場 埋蔵文化財センター2階 講座室／予約不要 先着40名

## 例 言

1. このパンフレットは平成19年7月24日から9月21日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第22回企画展「国家の風景 ―埴輪の描く古代―」にともない発行するものです。
2. 展示にあたっては諸星政得氏のご指導をいただき、展示は宮内良隆と大野安史、企画・パンフレットの執筆・編集は宮内が担当しました。
3. 企画展の開催にあたり、次のかたがたから多大なご協力とご指導、ご教示をいただきました。感謝申し上げます。

延命寺、日立市教育委員会、日立市郷土博物館、かすみがうら市教育委員会、富士見塚古墳公園展示館、片平雅俊、佐藤成男、千葉隆司、生田目和利（敬称は略させていただきました）

# 国家の風景

島国である日本でわたしたちは民族や国境を意識することなく自然に受け入れてきました。大陸のように他国と地続きで境を接する国々と大きく異なり、日本島に住む人間にとって、国家は見慣れた風景の一部であったでしょう。



市之代古墳群のある台地と小貝川

**倭人の出現** 日本人が最初に国家を意識するきっかけとなったのは中国大陸や朝鮮諸国との接触によってと考えられます。その接触がいつから、どのようにあったのか示す資料は日本にありません。

中国の文献『論衡（ろんこう）』に「周の時、天下太平にして、倭人來たりて暢草（ちょうそう）を獻ず」「周の時天下太平、越裳（えつしょう：ベトナム）は白雉を獻じ、倭人鬯草（ちようそう：薬用のキノコ）を貢す。」とあります。すでに日本は縄文時代に国が存在し、外交をおこなっていたこととなります。この記事が書かれた当時すでに周の時代から千年を経っていました。ここでいう倭人が地理的に日本人を指していたかどうか不明です。

朝鮮『新羅本紀』には「(前 50 年) 倭人達が兵を率いて辺境を侵そうとしたが、始祖に神徳があるということ聞いて、すぐに帰ってしまった。」「(前 20 年) 瓠公（ここう）という人は、元は倭人で、はじめ瓠を腰につけて海を渡って来たために瓠公と称した。」「(14 年) 倭人が兵船百余隻で海辺に侵入。」といった記事がみえます。

中国の文献は倭人の朝貢など外交関係の記事が主であるのに対し、朝鮮の文献では倭人の侵略事件や縁故関連の記事の多いことが特徴です。

**倭国諸国成立** 具体的な記事では『漢書地理志』（82 年成立）に「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国をなし、歳時をもって來たりて獻見すと云う。」とあ

ります。倭国が諸国家の集合体である実態と位置が示されている点でそれまでの記事と比べて正確といえます。

『後漢書「東夷傳」』に「建武中元二年（57 年）、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」「安帝、永初元年（107 年）倭国王帥升（すいしょう）等、生口 160 人を獻じ、請見を願う」という具体的な記事があります。

実際に江戸時代に博多湾・志賀島で掘り出された「漢委奴國王」と刻印された金印はこの記事のものとされています。

『三国志魏志倭人伝』（285 年成立）では「倭人は帯方郡の東南の大海の中におり、山の多い島のうえに国や邑（むら）をつくっている。もとは百余の国があり、その中には漢の時代に朝見に来たものもあった。いまは使者や通訳が往来するのは三十国」とあり、詳しく倭人の国について記載しています。

邪馬台国と卑弥呼に関する記事もここに初めて現れます。「卑弥呼は景初 2 年（238 年）以降、魏に朝貢して「親魏倭王」に任じられた。」とあります。

『新羅本紀』にも卑弥呼が使者を送った記事があります。

これらの記事は日本の弥生時代にあたり、百ヶ国以上の諸国家が存在して覇権を競うこともあったことがわかります。『三国志魏志倭人伝』は邪馬台国の

記事の内容と時間差が少なく信頼性が高いと思われます。

**古墳時代と統一国家への道** 3世紀後半、奈良盆地に全長276mの前方後円墳、箸墓（はしはか）が造られました。この時期から全国各地で古墳が築造され、古墳時代がはじまりました。この時代に大和朝廷の国家統一があったと考えられています。しかし、その内容をしめす日本の文字資料はわずかに七支刀銘、稲荷山古墳鉄剣銘、中平刀銘、江田船山古墳鉄刀銘しかありません。

『隋書』巻八十一列伝第四十六東夷倭国（636年成立）に「無文字，唯刻木結繩。敬佛法，於百濟求得佛經，始有文字。（文字なし。ただ木を刻み繩を結ぶのみ。仏法を敬う。百濟において仏教を求得し、初めて文字あり）」とあります。8世紀前半に『古事記』や『日本書紀』が編纂されるまでは口伝による伝承しかありませんでした。

このように日本の紀元前3世紀ころから6世紀まで、統一国家の成立にかかる重要な時期でありながら、資料の制限のため大きな謎となっています。

中国の資料では『宋書』に421年から478年にかけて「倭王（讚、珍、濟、興、武）が朝貢して朝鮮諸国をおさえて安東將軍に任命された。」とその間の倭国王朝の変遷についての記事があります。その後、両国の外交関係が断たれると倭国に関する記事は7世紀の律令国家との外交までなくなります。

『百濟本紀』には4世紀頃に、百濟と倭国の外交関係が活発になった記事があります。『新羅本紀』には4世紀中ごろから5世紀に倭国の侵略が激しくなった記事がみられます。

**国家の名称** 倭人・倭国は中国や朝鮮諸国が当時の日本を指して用いた名前です。8世紀初め律令体制で「日本」表記になったといわれます。『新羅本紀』には670年に倭国が国号を日本に改めた記事があります。

**国家の風景** これまで述べてきたのは中国・朝鮮など諸外国との外交における古代日本国家についてでした。そこに諸国連合として徐々に基盤を固めてゆく倭国の様子が窺えます。

一方、国内ではどうだったでしょう。農村的な共

同体である小諸国家は徐々に覇権的大国家連合に合併されていきました。

中国では1928年に古代都市遺構である殷墟（いんきょ）の発見によって殷（商）王朝の実在が確認されました。

生産的機能を果たす農村的集落から中枢として諸機関が密集し生産的機能をもたない都市へと変貌するとき国家の風景がみえてきます。

**古墳の盛衰** 茨城県内でも4世紀前半常陸太田市150m梵天山（ぼんてんやま）古墳、4世紀後半石岡市180m舟塚山（ふなつかやま）古墳、5世紀初頭の水戸市137m愛宕山（あたごやま）古墳など大きな前方後円墳が築かれました。ほかにも前方後方墳、円墳、方墳など数多くつくられました。埴輪の生産も6世紀を最盛期として供給され、樹てられました。

これらは地域の権力者のための大規模な土木工事や埴輪の生産活動でした。30mに満たない古墳まで前方後円墳の形が模倣されたのは、絶対権力の独占段階まで到達していなかったことを意味しています。

しかし6世紀末に埴輪の生産は中止され、その後7世紀初頭を最後に前方後円墳は全く造られなくなりました。これこそが権力を独裁した統一国家の存在を示しています。

**市之代古墳群** 小貝川右岸の独立した台地に21基の古墳があります。3号墳は復元約30mの小型の前方後円墳で馬形埴輪や人物埴輪など形象埴輪が多く出土しました。

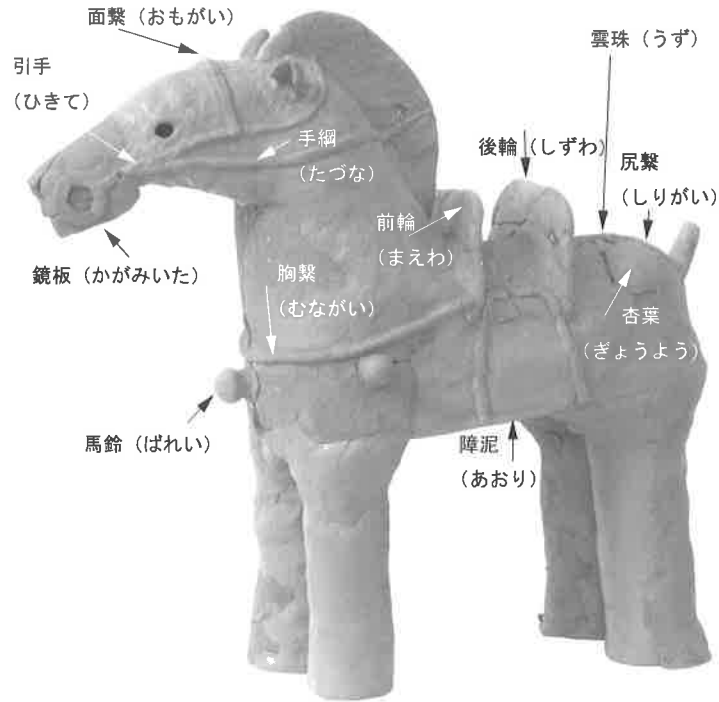
**糠塚古墳群** 小貝川右岸から台地に入り込んだ谷にのぞむ前方後円墳1基と円墳2基の合計3基からなる古墳群です。3基とも埴輪を出土しました。



糠塚1号墳発掘前

# 埴輪の風景

古墳に並べられた埴輪から古代の生活のさまざまな様子が浮かび上がります。



市之代 3 号墳出土 馬具をつけた馬形埴輪 (高さ 680mm)

**埴輪 (はにわ)** 古墳に並べて立てられた素焼 (すや) きの焼き物で、全国各地の古墳に分布しています。埴輪の名称は古く『日本書紀 (にほんしょぎ)』(720 年成立) に登場します。粘土を意味する「埴 (はに)」と円筒 (えんとう) の形を示す「輪 (わ)」が合体したものです。

茨城郡茨城町 (いばらきぐんいばらきまち) に下土師 (しもはじ) という地名があり、1953 年隣接地から日本最大規模の小幡北山埴輪製作遺跡 (おばたきたやまはにわせいさくいせき) が発見されました。「土師 (はじ)」とは、「土 (はに)」を扱う人々の意味から職業集団を表す「土師部 (はじべ)・土師連 (はじのむらじ)」になったものです。『日本書紀』に垂仁 (すいにん) 天皇三十二年 (西暦 3 年) 記に土師部が最初に埴輪をつくった、とされています。

『続日本紀 (しょくにほんぎ)』(797 年成立) には土師馬手 (はじのうまで) が持統 (じとう) 天皇と文武 (もんむ) 天皇の葬儀 (703 年と 707 年) にあたって重要な役割を務めたことが記されています。

埴輪の起源伝承は考古学の成果と一致しないので否定されますが、埴輪の製作者が土師部であったことから、古墳の普及と同時に全国に埴輪がひろがったことから、土師部が古墳の造営や葬儀の執行にも関わっていたことは事実と考えられます。

**埴輪の種類** 円筒埴輪 (えんとうはにわ)、朝顔形埴輪 (あさがおがたはにわ)、形象埴輪 (けいしょうはにわ) があります。



市之代 3 号墳出土円筒埴輪 (高さ 422mm)

形象埴輪には盾（たて）などを模した器財形埴輪（きざいがたはにわ）、武人（ぶじん）や男女を模した人物形埴輪（じんぶつがたはにわ）、馬や鳥などを模した動物形埴輪（どうぶつがたはにわ）があります。

形象埴輪は当時の生活の様子を知る上でたいへん貴重な資料となります。動物形埴輪のうち馬形埴輪は特別です。「飾り馬（かざりうま）」として馬具を着けた状態を表現したものが多く出土します。

馬具は馬を制御するための轡（くつわ）と騎乗（きじょう）するための鞍（くら）があります。轡は馬に装着する面繫（おもがひ）、口にかませる銜（はみ）、そこに手綱（たづな）をつける引手（ひきて）、銜を面繫につける鏡板（かがみいた）からなります。

鞍は前輪（まえわ）・後輪（しずわ）・障泥（あおり）などで構成され胸繫（むながひ）と尻繫（しりがひ）で馬体に装着されました。尻繫は雲珠（うず）で鞍と連結され飾りの杏葉（ぎょうよう）が下げられました。



市之代3号墳出土 朝顔形埴輪（現高 505mm）

朝顔形埴輪は普通の円筒埴輪に比べて段数が増え、その分大きくなります。円筒埴輪を器台（きだい）として、そのうえに壺（つぼ）を置いた姿を簡略化したものです。壺の口にあたる部分が朝顔の花のように広がり、壺の頸にあたる部分がくびれているのが特徴です。



市之代3号墳出土 肩甲をつけた武人像（現高 527mm）

小型の人物像です。肩の部分に縦の線が描かれた粘土板が貼り付けてあります。これは肩甲（かたこう）という甲冑の一部です。おそらく頭には冑（かぶと）を被っていたと思われます。6世紀後半の人物埴輪は、表現を大きく省略した例が多くなります。



市之代3号墳出土 男子像（現高 85mm）

典型的な古墳時代の男子像は髪を中央で振り分けにして両側の耳わきで髪を束ねて美豆良（みずら）を結ったものです。この男子像は顔の両脇に美豆良の痕跡がありますが、振り分けにした髪形が表現されていません。頭を1周する剥離（はくり）跡は帽子の罫（つば）です。帽子の風習は日本にないので帰化人を表現したものです。

顔面の眉から頬にかけて赤彩がみられます。



市之代3号墳出土 女子像 (75mm)

髷(まげ)を結った婦人です。頭の中央を結って前後に髷が扇状に張り出します。眉の部分に赤彩がみられます。



市之代3号墳出土 面繫(現長140mm)



左 市之代3号墳出土 手綱(現長310mm)

右 市之代3号墳出土 尻繫と剣菱形杏葉(現長310mm)

市之代3号墳からは複数体分の馬形埴輪破片が出土しています。



市之代6号墳出土 円筒埴輪(現高240mm)



糠塚1号墳出土 武人埴輪(現高355mm)

冑(かぶと)をつけた武人像です。腰から上半身が残っていますが、服装は省略されています。冑も形を表わしただけで、細かい部分は省略されています。腰の部分でスカートのように裾広がりになっているので掛甲を着用した姿であることがわかります。

糠塚1号墳は武人像を多く出土しています。古墳に葬られた人間は兵士や、あるいは彼らを直接指揮する地位の人間であったことを示しています。



糠塚1号墳出土 鶏形埴輪(高さ295mm)

小型の鳥形埴輪ですが頭に「とさか」がついているのでニワトリとわかります。ニワトリの頭や鳥の羽の部分がほかにも出土しています。

倭建命(やまとたけるのみこと)伝説では命(みこと)がなくなったとき白鳥になったといわれます。この時代、鳥は人間の生まれ変わり信じられていました。古墳からさまざまな鳥形埴輪が出土しています。この埴輪も単に鶏を埴輪にしたのではなく、生まれ変わって鶏となって時を告げる役割を果たそうとする姿なのでしょう。



糠塚1号墳出土 盾形埴輪 (現高 303mm)

盾の器財埴輪です。盾の上端が欠けていますが、上下に連続した三角文が描かれています。円筒埴輪のような基部の上に盾の下部をつけて、盾の上部は基部に取り付けた支柱で腕のように支えています。

盾形埴輪は伝統的な形象埴輪で4世紀後半から出現します。6世紀になると人物と組み合わせた盾持ち像が製作されました。



糠塚1号墳出土 武人埴輪2 (現高 141mm)

2体とも冑を被った武人像です。糠塚古墳から出土した武人埴輪の冑はすべて衝角付冑(しょうかくつきかぶと)と呼ばれるもので、眉庇付(まびさしつき)の珍しいものです。2の像は粘土粒を貼り付けて、鉄板をつないだ鋳留め(びょうどめ)を表現しています。1の像がそうした細かい表現が省略されているのと対照的です。



糠塚1号墳出土 男子像 (現高 346mm)

美豆良を結う男子像です。右側の耳脇に美豆良、耳下に耳環がついています。左側は美豆良が脱落して耳輪だけが残っています。市之代3号墳出土の男子像と同じく髪形を分けた表現がみられず頭が尖っているので、頭巾か帽子の被り物(かぶりもの)をしている姿と考えられます。胴部左半身が一部残っていますが服装の表現も省略されています。



糠塚1号墳出土 頭巾をつけた女子像 (現高 210mm)

面立ちから女子像と思われませんが、頭部は無文で天に向かって扇状に広がっています。頭巾を被って髪を隠した様子を表現しています。この頭巾によって象徴される特別な立場にいた人物像と思われる。



糠塚3号墳出土 農夫像 (現高 222mm)

藁笠を被った農民を表現しています。耳輪・美豆良はありません。笠は頂部で結ばれ、先には藁の切り口である円文がつきます。頸を一周する帯には粘土粒がつけられていました。馬形埴輪の破片とともに出土しているので馬飼いの像かもしれません。6世紀後半には庶民像もたくさん製作されました。



糠塚1号墳出土 武人埴輪1 (現高 142mm)





糠塚1号墳出土 たてがみ (現長 240mm)



糠塚1号墳出土 鏡板 (現長 135mm)



糠塚1号墳出土 馬鐸 (現高 78mm)

馬具の胸繫につける小銅鐸です。埴輪をみると馬具には馬鈴や馬鐸など「鳴り物」がたくさんつけられたようです。



糠塚1号墳出土 鞍・尻繫 (現高 145mm)

馬形埴輪の鞍から後の部分です。鞍は後輪が失われていますが縫い目を刺突文(しとつもん)で細かく表現しています。尾のまわりには尻繫が結ばれ鞍と連結する雲珠(うず)に鈴杏葉がつきます。



糠塚1号墳出土 武人埴輪 挂甲 (現高 160mm)

胴部のみが残る武人像です。全体に沈線描きで小さな鉄板でできた挂甲を表現したものです。筒袖状に腕まで覆っていることがわかります。また腰に剣を装着していた痕跡があります。6世紀後半には埴輪の表現は省略化され、挂甲まで表現されることは少なくなっていました。胴部表現のある人物埴輪は全体のつくりが丁寧であることがわかっています。



糠塚1号墳出土 小鳥 (現長 50mm)

手づくねでつくられた小鳥の埴輪です。単独で出土しましたが、実際には別な形象埴輪につけられていたものです。家形埴輪や盾形埴輪につきます。



糠塚1号墳出土 円筒埴輪

(左 365mm 中 378mm 右 366mm)



左 糠塚3号墳出土円筒埴輪 (432mm)

中 糠塚1号墳出土朝顔形円筒埴輪 (640mm)

右 糠塚1号墳出土円筒埴輪 (369mm)



大日山古墳群出土 円筒埴輪 延命寺所蔵

(左 452mm 中 455mm 右 453mm)

**富士見塚古墳群**（ふじみつかこふんぐん） かすみ  
がうら市柏崎にあり、霞ヶ浦の内湾（通称「西浦高  
浜入り」）に望む標高 25mの台地の先端部を占める  
全長 80mの前方後円墳 1 基、円墳 2 基からなる古墳  
群です。

#### 富士見塚 1 号墳家形埴輪

現高 29.2cm、正面幅 23.5cm、奥行 17.2cm

寄棟造（よせむねづくり）の家屋像です。四角い  
建物に倍ほどの高さの角のない屋根をのせ、草葺（く  
さぶき）を表現しています。建物と屋根の間は軒先  
が突出して区別するほか、建物壁に沈線による矢羽  
根文（やばねもん）が描かれています。建物正面は  
三間を表現しており、中央間を入口として、左半間  
の上半分を窓にし、下に縦方向の矢羽根文を描いて  
います。建物の他の三面の壁は横に平行沈線が描か  
れ校倉造りを表わし、四隅は丸柱となっています。

屋根部分は全体に無文で棟上にあおり板とおさえ  
の三本の堅魚木（かつおぎ）がのっています。

全体に丸みを帯びた柔らかな印象で、素朴な草葺  
きの家屋を表現しています。後述する水木 5 号墳出  
土家形埴輪のように草葺屋根の家屋表現はこの付近  
の地域性を表現しているといえます。（かすみがうら  
市所蔵）

**水木古墳群**（みずきこふんぐん） 日立市水木町  
にあり標高 20mほどの海岸段丘上にある古墳群で、  
5 号墳は太平洋を望む崖際に立地しています。直径  
約 30mの円墳と考えられています。

#### 水木 5 号墳家形埴輪

1：現高 80.5cm、正面幅 46.0cm、奥行 28.2cm

2：現高 82.5cm、正面幅 54.0cm、奥行 30.2cm、

この古墳からは 2 基の家形埴輪が出土しています。

どちらも形や手法が良く似た大型の寄棟造（よせむ  
ねづくり）の家屋像で、全体は細長い二等辺三角形  
となっています。上辺の棟上に障泥板（あおりいた）  
を表現し、2は3本の堅魚木（かつおぎ）がのって  
います。1は1本が残っていますが脱落した3本の  
痕跡があります。

軒先が突出して建物と屋根を区別します。屋根は  
丸みを帯びて草葺屋根を表現しています。建物部分  
には五本の突帯が横にめぐり、四隅には柱を表わす  
縦の突帯がみられます。1は建物正面・背面壁に中  
心より左よりに方形の高窓があります。2は正面壁  
だけに窓があります。両側の側面壁には円形透かし  
がみられます。

2つの家形埴輪のもっとも大きな特徴は彩色です。  
屋根を中心に暗い灰色で斜格子を描いて、三角文・  
菱形文を暗灰色・赤色・無彩色で塗り分けています。  
屋根全体を彩色し、1のあおり板に沈線で連続三角  
文を描き塗り分けています。2では建物にも一部彩  
色がみられます。（日立市郷土博物館管理・個人蔵）  
**埴輪伝承**（はにわでんしょう）

『日本書紀』の垂仁（すいにん）天皇三十二年（西  
暦 3 年）七月記に、野見宿禰（のみのすくね）が皇  
后日葉酸媛命（ひばすひめのみこと）の葬儀のとき  
に殉死（じゅんし）のかわりに土製の人馬を陵にた  
てることを申し述べ、出雲から土師部を呼び寄せに  
最初に埴輪を作ったとされます。この功績により野  
見宿禰は土師臣の姓（かばね）を与えられ、後に子  
孫は菅原（すがわら）、大江（おおえ）姓に改めまし  
た。

野見宿禰は相撲力士（すもうりきし）の祖先とし  
ての伝承をもっていました。じつは古墳から出土し  
た埴輪のなかには力士を表現したものがみられます。

このことから、6 世紀代に古墳がつくられ形象埴  
輪が盛んにつくられる頃には野見宿禰の伝承は広く  
人々に知られていたと思われま。埴輪の起源は伝  
説ですが、それは当時の人々に深く信じられていま  
した。

## 特別展示【史記の時代】 壮大な中国建国の記憶

『史記』は紀元前 91 年頃に司馬遷（しばせん）により編纂（へんさん）された中国の歴史書で、神話時代から夏（か）・殷（いん）・周（しゅう）・春秋戦国時代（しゅんじゅうせんごくじだい）・秦（しん）・漢（かん）王朝の武帝に至る紀元前 2000 年以上前から紀元前 90 年頃までを記しています。中国の神話伝説の時代から、統一国家の歴史をしるした貴重な記録といえます。

この重要な時期に中国では金属器文明（きんぞくきぶんめい）を発達させ、武器や貨幣など国家の基礎となる製品がつけられ、東アジアに壮大な文明を築いてゆきました。

今回の特別展示は、こうした古代中国の文明の大きな流れを、現代に残された当時の出土品の実物を見ることで理解するものです。

今回は所蔵者のご協力によって貴重なコレクションの一部を参考展示します。



龍形帯鉤（りゅうけいたいこう） 漢 前3世紀（全長97mm）

**青銅器（せいどうき）** 古代中国では殷（いん）の時代紀元前 1500 年の頃から青銅（銅と錫と鉛の合金）器が作られました。金属製品の使用によって農耕・土木・戦争が大きく変わりました。

初期は実用品が主でしたが、次第に大型の祭器がつけられるようになりました。紀元前 600 年頃の春秋時代になると鉄器の生産もはじまりましたが、漢の時代頃まで青銅器が主流でした。

日本では弥生時代の前 2 世紀ころから青銅器と鉄器が同時に伝わって金属器時代がはじまりました。日本でも加工の容易な青銅器が主流でした。弥生時代前半は、九州・山陰・四国地域を中心に金属器の文明は浸透してゆきました。

青銅器はさまざまな方面で利用されました。今回展示した中国青銅器は日本の弥生時代のものと時代も地域も大きく違うため比較は難しいですが、古代

金属器文化を知るためには格好の資料です。

**古代貨幣** 古代中国の貨幣の始まりは、子安貝（こやすがい）をもちいた貝貨（ばいか）といわれています。殷から周時代の初めまで流通していました。殷の時代末に銅で鑄造（ちゅうぞう）された銅貝（どうばい）が作られ春秋時代から戦国時代まで流通しました。海岸地帯にあった「楚（そ）」では銅貝に文字を刻んだ「蟻鼻錢（ぎびせん）」と呼ばれる貨幣が戦国時代末まで作られました。

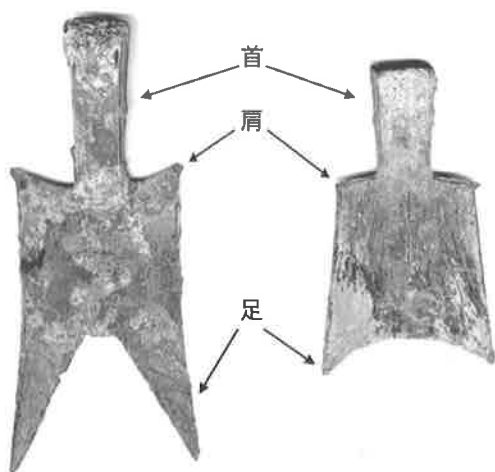
楚以外の国では貨幣を金属で製作するようになると最初に取り入れたのは青銅製の実用品の姿でした。周時代に、農機具や工具の形状を象徴化した「原始布（げんしふ）」が登場します。工具の「斧（フ）」と「布（フ）」は同音で、どちらも当時は流通性のある高価値な品物として物々交換に用いられたので金属貨幣が流通するときに、これを布とか布幣（ふへ

い) とか呼んだのです。春秋時代に、黄河流域を中心に、柄の部分が空洞な空首布(くうしゅふ)が登場します。すでに実用品ではなくなっていますが柄の形をそのままに残しています。やがて小型化して柄の部分が平坦な平首布(へいしゅふ)となります。

同時期に北方諸国では、青銅器(せいどうき)の刀を象徴化した刀幣(とうへい)が作られるようになります。

戦国時代においても布幣・刀幣は流通していましたが、戦国時代末に円形貨幣が現れ、その後「秦(しん)」の国家統一により通貨の統一がおこなわれました。

日本の弥生時代遺跡から出土する貨泉(かせん)は王莽(おうもう)の新王朝(紀元8~25年)が発行したものです。日本で最初の流通貨幣が発行されたのは708年の和同開珎(わどうかいほう)です。  
**空首布(くうしゅふ)** 首(柄)の部分が実際の農具や工具の柄と同じように中空となっている形状からきた呼称です。まだじっさいの青銅器の姿をそのまま残しているといえます。多くは、面、背に地名や数字などの象形文字が鑄出(いだ)されました。



右 斜肩弧足(しゃけんこそく)空首布  
 戦国時代前期 前3~4世紀(高さ83mm)

左 聳肩尖足(しょうけんせんそく)空首布  
 春秋中期~戦国中期 前6~4世紀(高さ119mm)

**平首布(へいしゅふ)** 実用品の立体的な姿は失われ、首の部分が平らになりました。製作も容易になり戦国時代中期から末期にかけて大量に作られました。「首」・「肩」・「足」の形状など、あるいは面に書かれた文によって多くの種類があります。「三晋(韓、

趙、魏)」と「周」、「楚」、「燕」、「中山」などで作られ流通しました。



方足布(ほうそくふ) 戦国時代後半 前4~5世紀  
 (高さ 左48mm 右47mm)

**刀幣(とうへい)** 春秋戦国時代(しゅんじゅうせんごくじだい)に北方諸国で作られ、青銅器の刀を象徴化したものです。先端の「首」・「背」の形状・面文(めんもん)の種類などにより時代や地域を分類することができます。尖首刀(せんしゅとう)・円首刀(えんしゅとう)・方首刀(ほうしゅとう)などがあります。春秋時代中期頃から戦国末期まで製造・流通していました。



方首刀 春秋末~戦国時代末 前5~3世紀(長さ139mm)



円首刀 戦国時代後半 前4世紀(長さ146mm)

**蟻鼻錢(ぎびせん)** 原始貨幣(げんしかへい)である貝貨(ばいか)を受け継いだ銅貝(どうばい)の一種で春秋戦国時代に現在の中国南部を統治した「楚(そ)」の貨幣です。文字の凹凸が蟻(あり)の顔、あるいは鼻に見えるのでつけられた名前です。別名「鬼臉錢(きせんせん)」といいます。当時、他の国では布幣や、刀幣、圓錢(かんせん)など形状そのものが変化しましたが、楚は海岸近くにあつて、貝貨の影響を最後まで強く残していました。面文(めんもん)は「異」、「君」、「金」など20種類ほど確認されています。



蟻鼻錢 春秋戦国時代 前8~3世紀 (左15mm 右16mm)

**帯鉤(たいこう)** 中国に春秋時代前5世紀頃から、乗馬の風習が広まった頃、ズボンのような衣服とともに普及した革帯の留金具のことです。一端が鉤状(かぎじょう)になっており、裏面にボタンのような突起があります。革帯の端に帯鉤の裏のボタンを掛け、革帯の一方の端に帯鉤の先端を引っかけて留めます。春秋時代から南北朝時代4世紀頃にかけて作られ、工芸品として多様な発展をみせました。

兵士などは実用的な小帯鉤を着けており、はじめは小型で簡素な実用品でしたが戦国時代中頃になると黄金製など華美な帯鉤を高い身分の人物が着用しました。

特徴としては、軸に綺麗な象嵌(ぞうがん)を施すもの、後ろのボタンに印章を彫りこんだもの、軸が龍や虎の形になったものがあります。また鉤先(かぎさき)にも龍首(りゅうしゅ)や虎首(こしゅ)などの彫刻がほどこされました。

騎馬の風習が中国王朝に与えた非常に大きな影響と、貴族文化による衰退を暗示しているともいえます。

日本ではわずかに朝鮮半島で製作された馬形帯鉤の出土例があるほか、大分県日田市に伝世品があります。



琵琶形帯鉤(びわがたたいこう)(長さ116mm)



竜形帯鉤(りゅうけいたいこう)(長さ112mm)



虎形帯鉤(こけいたいこう)(長さ109mm)

**印章(いんしょう)** 古代メソポタミアを起源として、前5000年頃文字の発明に次いで使用されたとみられます。当時の印章は円筒に楔形(くさびがた)文字を刻み粘土板に回転圧痕(かいてんあつこん)を残すものでした。

中国で印章が普及するのは春秋戦国(しゅんじゅうせんごく)時代ころからで、秦始皇帝(しんのしこうてい)が作らせた「伝国璽(でんこくじ)」は秦が滅んだ後も皇帝のシンボルとなりました。

漢(かん)時代になってからは官僚(かんりょう)制度の整備とともに官印(かんいん)が普及してゆきました。また印綬(いんじゅ)制度は、印の材料や紐(ひも)の色で皇帝の臣下の序列を表し、皇帝が臣下にさずけた身分を証明する重要な役割がありました。日本でも後漢光武帝(ごかんこうぶてい)から与えられた「漢委奴國王(かんのわのなのこくおう)印や卑弥呼(ひみこ)が魏王(ぎおう)から与えられた「親魏倭王(しんぎわおう)印は金印でした。

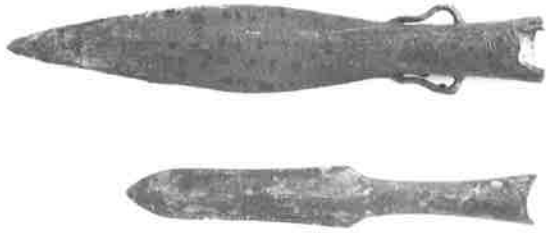
しかし日本の古代国家には印章の重要性は認識されず、古墳などからの出土例はありません。印綬制度は日本の古墳時代には取り入れられなかったようです。日本国内で印が使われるようになるのは奈良時代以降になります。



銅印 漢 前3~紀元3世紀 (左18×18mm 右19×12mm)

**銅矛(どうほこ)** 先端に刃があり、基部が袋状になっていて、長い柄を差し込んで使用しました。先

端の刃は柄に直線となります。根本付近に半環状の耳がつくものがあり、布などを結び旗印などに使用しました。



銅矛 戦国時代 前3~5世紀(長さ 上212mm 下156mm)

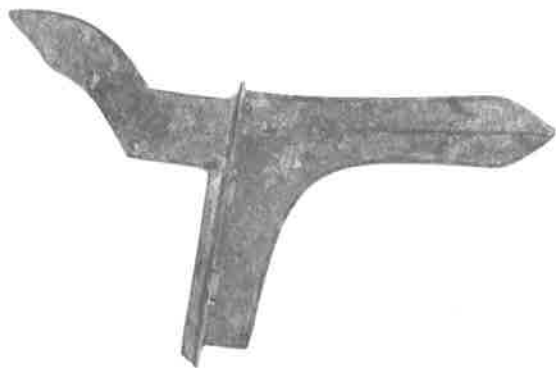
**銅劍(どうけん)** 戦闘用の手持ちの刃物、片刃を刀(とう)、両刃を劍(けん)といいます。刀が必ずしも戦闘だけに使われるものでないのに対し、劍は戦闘用の武器として作られました。そのため劍を所有する人間の身分を象徴する装飾的な儀物(ぎぶつ)になりました。



銅劍 戦国時代 前3~5世紀(長さ347mm)

**銅戈(どうか)** 刃が長柄の軸に対してほぼ直角につきます。基部は柄の穴に差し込むため薄い板状になっています。複数の戈や柄の先端に矛を組み合わせた武器を戟(げき)といいます。

広大な中国の平原で戦う戦車で用いられました。日本では大型化した祭礼用として作られました。



銅戈 戦国時代 前3~5世紀(長さ255mm)

**銅鏃(どうぞく)** 矢の先端に鏃(やじり)をつけるのは先端を鋭くして矢の威力を増すため、先端を重くして飛ぶ方向を安定させるためです。金属はその点でうってつけの素材でした。石鏃(せきぞく)で細かな加工ができなかったものが金属製品になっ

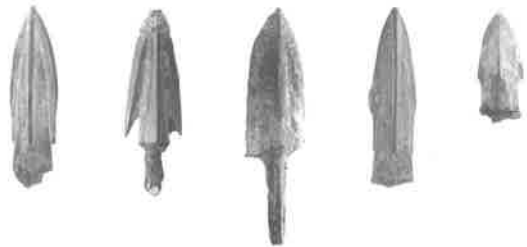
て、精密な加工がおこなわれるようになりさまざまな形態のものがつくられました。先端の刃先の部分と矢を繋ぐための茎(なかご)からなります。

**大型鏃(おおがたぞく)** 茎と先端が一緒に鋳出されています。刃の部分にみられる透かし穴は鏃の大きさに対し重量を軽くするため、横風などの影響を少なくするため、飛ぶときに風をきりさく音響効果のためともいわれています。刃が研ぎだされていないので儀式用のものであったかもしれません。



大型鏃 戦国時代 前3~5世紀(長さ105mm)

**小型鏃(こがたぞく)** 茎と先端は別々に作られています。先端部分は鋳型から出されたあとに刃を研ぎ出しています。刃は簡単に研げるように薄い3枚のヒレ状になっています。実用品です。



小型鏃 戦国時代 前3~5世紀

(左から 現長37mm 39mm 49mm 37mm 23mm)

**小銅鐸(しょうどうたく)** つぶれており、表面は磨耗して光沢がありますが無文です。鈴などと同じように比較的小さな音で注意を引く場合に使われたのでしょう。



小銅鐸 年代不詳

中国・朝鮮諸国と倭国（古代日本）年表

西暦	中国王朝		倭国(日本)関連記事	史料成立年代	日本
前1500	殷 (商)				(じょうもん) 縄文時代
前1120	周		「倭人来たりて暢草を献ず」 「論衡」		
前770	春秋				
前403	戦国				
前221	秦				弥生時代(やよいじだい)
前202	漢 (前漢)				
8	新		前50】倭人、朝鮮侵略を企てる「新羅本紀」 14】倭人が朝鮮に侵攻「新羅本紀」		
25	後漢		57】倭奴国王金印受「後漢書」 59】倭国と新羅が互いに遣使	82】「漢書」 90】頃「論衡」	
107			107】倭国王漢に遣使「後漢書」 123】倭国と新羅が講和 173】倭女王卑弥呼が新羅に遣使「新羅本紀」 238】卑弥呼が魏に遣使「三国志」		
220	三国時代				
265	晋(西晋)			285】「三国志」	
300			300】倭国と新羅が互いに遣使「新羅本紀」 312】新羅女子を倭国王に送る「新羅本紀」		
317		五胡十六国時代	345】倭国と新羅が断交「新羅本紀」 369】百済が倭王に七支刀を送る		
386	東晋	北魏	390】新羅王子を人質に送る「三国遺事」 391】倭が百済・新羅を破る「広開土王碑文」 397】百済太子を人質に送る「百済本紀」 402】新羅王弟を人質に送る「新羅本紀」 405】百済太子帰国「百済本紀」 413】倭国東晋に朝貢「晋書」	414】広開土王碑	
420			418】新羅人質逃げ帰る「新羅本紀」		
421			421】倭王贊が朝貢「宋書」 425】倭王珍が朝貢「宋書」 428】倭国から百済へ遣使「百済本紀」		
439	(南朝) 宋	(北朝) 北魏華北統一	445】倭王済が遣使「宋書」 462】倭王興が遣使「宋書」 471】稻荷山鉄剣銘 478】倭王武(雄略) 宋に遣使「宋書」	445】頃「後漢書」	
479	(南朝) 齊			488】「宋書」	
502					
535	(南朝) 梁	(北朝) 東魏	西魏		
550		(北朝) 北齊	(北朝) 北周		
557					
557	(南朝) 陳				
577		隋			
581					
589					
618		唐	(*593) 聖徳太子が摂政となる (*630) 遣唐使はじまる (*645) 大化の改新 663】倭国水軍が百済を助ける「新羅本紀」 (*663) 白村江の戦い 670】倭国が「日本」と改めた「新羅本紀」 (*689) 飛鳥浄御原令制定 (*701) 大宝律令制定	636】「梁書」 648】「晋書」 656】「隋書志30巻」	(あすかじだい) 飛鳥時代



日立市水木5号墳出土家形埴輪1



かすみがうら市富士見塚1号墳出土家形埴輪



日立市水木5号墳出土家形埴輪2（裏）



日立市水木5号墳出土家形埴輪2（表）